

三上達也教授追悼座談会

井上 和夫 (立命館大学名誉教授)

森 隆知 (立命館大学政策科学部)

稲葉 光行 (立命館大学政策科学部)

司会 宮脇 昇 (『政策科学』編集委員長)

- I. 三上達也先生の研究
- II. 三上達也先生の教育
- III. 三上達也先生のお人柄

宮脇：本日はお集まりいただきましてありがとうございます。2014年に亡くなられた政策科学部の三上達也教授の追悼論文集の座談会を始めさせていただきます。大きく分けて故人の研究、教育、お人柄の3部に分けて、ご自由にお話しいただきたいと思います。

三上先生の研究については井上先生がよくご存じですので、はじめに井上先生からお願いいたします。

I. 三上達也先生の研究

井上：その前段として、私の立命館大学理工学部の研究室の話と、在職中の出来事なども少し話しをさせていただきます。1970年の大学紛争当時、私は理工学部の学生主事をしていました。法学部からは、後に政策科学部の初代学部長になられた山口定先生が学生主事として出ておられました。山口先生はその数年後に大阪市立大学に移られ、定年退職後に立命館大学に戻ってこられました。大学紛争時は学内でもいろいろな事件があり、学生部長声明がしばしば出されたのですが、その文面案を6学部の学生主事が二人一組の交代で作成しました。私は山口先生とペアになったのですが、山口先生は意見交換の後しばらく考えて、サーッと書かれてずいぶん助かりました。紛争時、広小路学舎で学生主事会議をしている時に狭いキャンパス内で学生集団が衝突しかけたことがあり、会議を中断して現場で様子を見守っていると投石があり、私は頭を3針縫う怪我をしたこともあります。その20数年後に、山口先生が政策科学部長をされている時、BKCは理工学部だけでしたが、私は理工学部長を務めました。また、1988年に

シミュレーション・ゲーミングの国際会議（ISAGA）が京都国際会議場であり、国際関係学部の初代学部長であった関先生が会長をされました。後に立命館平和ミュージアム館長をされました安齋先生は当時国際関係学部教授でしたが、安齋先生とともに私も国際会議の運営に参加いたしました。その時、私の研究室の多くの大学院学生が受付や会場係りとして手伝いました。本日お越しの森隆知さんは当時修士の大学院生でしたが、そのお一人です。



写真1：井上先生

私自身の研究は、もともと制御理論で適応制御系を研究していましたが、大阪大学から立命館大学にきましてからヒューマンインターフェースとか、多峰性関数の最大値探索問題などをテーマにしました。私の研究室の初期の大学院修了者・荒木義彦さんが学科の助手になり、現在は理工学部教授ですが、彼と一緒に知識工学や人工知能の研究を進めていきました。彼が助教授になりその後任に私の研究室の大学院博士後期課程修了者・亀井且有さんが助手に任用されました。彼は現在、情報理工学部教授で立命館守山高校の校長も兼任しています。理工学部がBKCに移転した頃、私は滋賀県工業技術センターの顧問をしていましたが、信楽窯業技術試験場との共同研究で、陶器の焼成炉で温度上昇とともに雰囲気酸化から還元に移して色付けする熟練者の焼成過程を、ファジイ理論を使つての自動運転の研究・開発も行いました。これらは亀井さんと大学院学生との共同研究です。三上さんは亀井さんが助手になった頃、卒業研究で私の研究室にこられ、大学院博士後期課程まで進学されました。研究テーマは知識工学に関するもので、研究内容については亀井さんが紀要本号に詳しく書いています。私は立命館在職中、常に複数の教員と共同研究ができましたし、大学院学生も修士・博士課程の学生が多数いました。理工学部が衣笠時代、大学院学生は各専攻とも多くはいなかったのですが、私の研究室は常に数人の修士学生と、博士学生も途切れずいました。当時の理工学部の研究室では最も多かったと思います。博士後期課程修了者は20名を越えますし、国公私立大学の教授・准教授になった方は19名、立命館大学にも4名います。

学生への指導は、人によってはそれぞれ違うのですが、自分で切り開いて進んでいく人もいれば、若干レールを敷いて最初ちょっと押し出してやれば進む人もいます。特にこれをやれとはいわずに、やりたいことを聞いてそれを伸ばしていくという方法です。学部学生は数人ずつ大学院学生のいくつかのグループに振り分けましたが、大学院学生はそれぞれ自分の選んだテーマで個性を伸ばしていき、研究が足踏みしているときには私が支えました。私は毎日夜かなり遅くまで大学にいましたし、土曜日は毎週、日曜日もしばしば出勤するほど仕事が楽しかったです。三上さんは音楽、ジャズピアノの演奏が得意でしたが、自分の好きなことを研究テーマに選び、取り組んでいきました。余談ですが、ロームの澤村社長は私の研究室の出身です。**稲葉**：研究上のおつきあいはそんなに長いわけではないのですが、節目、節目で三上先生の研究にふれる機会がありました。私は、立命館文学部哲学科の出身ですけど、哲学の本を読んで人間というのを理解しようと思って勉強していたのですが、いくら読んでよくわから

ない。大体、人間が2000年前に考えていたことをさっと本を読んでも、わからないと思って、そうこうしているうちに人工知能という分野があると知りまして、コンピュータを使って人間の知能をシミュレーションして人間を理解するというアプローチは面白いかもしれないと思って人工知能の勉強を自分なりに始めたり、当時の理工学部の先生に頼んで人工知能の授業に出たりしていました。そうこうするうちに「立命館大学理工学部の大学院生で人工知能の研究をやっている人がいる」という噂を聞きまして、ぜひその人にお会いしたいと思って、いろんな人に聞いてたどりついたのが三上先生でした。

私は当時、学部の3、4回生で今の有心館（当時は理工4号館）に三上先生を訪ねて行って、当時、先生はドクターだったと思いますが、人工知能のお話を聞きました。その中で編曲する人工知能をつくっているというお話を聞いて、ある意味、ショックを受けました。人工知能というと、文学部の人間からすると計算だけで機械に近い感じだったのが、人間に近いことを人工知能研究としてやられていることにショックを受けました。私は当時、哲学部の大学院にいかうかどうしようかと思っていましたが、人工知能が人間を理解する上でキーになることを三上先生のお話



写真2：稲葉先生

から感じまして、結局、大学院にはいかずにコンピュータ会社の富士通に入ることにしました。そこで「人工知能の研究をしたい」といったら当時の企業は結構変わった人を片っ端から採っているところがあり、文学部哲学部出身であってもちゃんと人工知能研究グループに入れてもらえました。その後、ハワイ大学大学院にもいったのですが、ずっと人工知能の研究をしていました。特に言葉を理解する人工知能の研究をしていました。10年くらい人工知能の研究をしていたのですが、10年くらいたって、ことばを深く理解する人工知能がなかなかできなくて「このままずっと人工知能の研究を定年までしていてもたいしたものできないんじゃないか」と思うようになりました。その根本的な原因は「人間というものを、ただ一つの単体としてとらえるのではなく、社会や文化の中でとらえないといけないのではないか」と思いまして、人工知能研究に限界を感じて、もう少し研究の幅を広げようと思っていたところに政策科学部の人事の話がありまして、社会とか文化を勉強しながら文理融合で研究するというのを見て、これは面白そうな学部だと思って応募して採用されてきたら三上先生がおられました。

三上先生は、もう編曲の研究はされてなくて社会シミュレーション、ある種の人工知能とかエージェントを使った社会のシミュレーションの研究をしておられて、まさしく私が人工知能研究で行き詰まっていたところを研究されていて「こういうことをやることで人間を理解できるんだ。将来的にいい人工知能はこういう研究をもとにできるんだな」ということを三上先生の研究を通して教えていただいたという気がします。そういう意味で、節目、節目で行き詰まると三上先生がおられて、人工知能研究の人間性の部分を勉強したり、社会への研究への適応可能性とかを勉強させていただいたという気がします。

三上先生の研究スタイルは、何よりも研究が楽しくないといけないということで、ものすご

く楽しみながら研究されているという姿勢も大変いい刺激になりました。特に理工学系、コンピュータの研究というのは徹夜につぐ徹夜でプログラムをつくってやるみたいな辛い感じがあったのですが、三上先生は「楽しんでやるのが一番だ」といわれていたもので、その点でも研究を進める上で動機づけに関して三上先生から影響を受けました。

森：私は学部の3回生から4回生に進学する時に卒業研究を選択する時、どこにしようかなと思っていたのですが、立命館大学はその頃、情報理工学部がありませんでしたので電気工学科がそれを含めた学部でしたから、電気にも興味があってプログラミングにも興味があったので、どうしようかなと思っている時に井上先生の研究室でやっている研究テーマをみると井上先生は制御工学がご専門ですが、その中で三上先生の編曲システムがあつたり、辺見さんという方のヒューマンインターフェースだったり、亀井先生のヒューリスティックスがあつて、僕はこの研究室だと思ってエントリーして幸いに研究室に所属することができました。研究室に入る前に顔合わせがあつて、その時は井上先生の研究室に大学院生がたくさんいるということを知らず、「あれ、何か髭を生やしたおじさんがいる。知らない人がいる。そうか、大学院は博士課程の院生がいて、これが理工学部の講座形式の研究室なんだ」と初めて知って、その時は大学院への進学は思わなかったのですが、進学する時の一つの重要なきっかけになったのかなかと思っています。

その後、4月になって進級してセミナーハウスで合宿した時に自分の研究テーマの希望を出して院生たちが相談に乗ってくれて、その時、三上先生がされていた研究も興味があつて辺見先生がやられていた研究も亀井先生の研究も興味があつて、どれにしようかなと思ったのですが、結果的に亀井先生のグループに配属されることになりました。人工知能のこととかいろんなことができる研究室だったので自分が所属したところだけでなく、最初は学部生の時は自分が入ったグループだけで手一杯ですけど、三上先生がいろんなグループのひっつけ役というか、グループ



写真3：故人の博士論文表紙

のことだけやっていると、三上先生が「じゃ、飲みにいこう」と誘ってくれて、そこで「人工知能は何をやっているのかか」という話をしているような情報を共有して知的な刺激をもらって、私が大学院に進んだ時には「大学院生同士で勉強会をしよう」と「みなで発表会をしよう」と人と人をつなげる、研究を一方だけではなく、まさに今の政策科学部という多角的な研究を体現されて、自分自身はなかなかできていないのですが、有益な刺激を受けたことを思い出します。あとドクターをとられた研究である編曲システムで研究発表される際に、今でこそ音楽の研究するのにコンピュータをもってきてそこで全部音を出しますが、当時はOHPをつけてあとは口頭でしゃべるスタイルが一般的だったのですが、三上先生は音楽を研究されているので、当時のラジカセを持参して「私がつくった編曲システムはこうだ」というスタイルで発表されており、今だったら普通ですけど、その当時からマルチメディア的な発表をされていたことを覚えています。

Ⅱ. 三上達也先生の教育

宮脇：三上先生の教育、特に学生とのかかわりについて、井上先生からいかがでしょうか。

井上：森さんからいわれたように自分だけの研究ではなく、まわりを巻き込んでいくという形で。三上さんの性格は豪放磊落で、細かいことにこだわらず、全体を見ていくというスタイルの人ですから、まわりの人をうまく全体をとらえて話をしたり、そういう感じでしたね。政策科学部でもおそらく学生といっしょになっているいろんなことをやっていたと思いますね。学生から聞いても「よかった」という、研究スタイルを含めて。

森：三上先生のゼミ要項をもってきたのですが、ゼミを始められた時から「人間というものはつくづく不思議な存在だと思う」という、この言葉からゼミの研究の説明が始まるというスタイルをとっておられて、まさに今日、お話が出たように一番のベースは人工知能、認知科学になるのですが、人間というものに興味があって、それがどういうものかを明らかにしたいというところがずっとあったんだなというところが、つくづく今日、お話を聞いていても、「ああそうだったんだな」と思うところですね。



写真4：森先生

去年、一昨年の彼のゼミ学生の研究テーマを見ると「食文化の変化がもたらす社会への影響」とかタイトルだけ見てみると人工知能と関係ないんですが、井上先生の研究スタイルを僕も踏襲していますけど、三上先生も踏襲されて、学生自身がまず「何に興味をもっているか」と話を聞いて、そこからどういうことが研究テーマになるんだということをされていったんだなと。別の学生の研究テーマである「旅行業界の展望」も人間と旅行という観点から研究されたのだろうと。「コミュニケーションの崩壊過程の構図」、コミュニケーションは人にとって大切なことですから、そのあたりを研究されたんだな。「いじめ問題について」とか「歴史都市京都の魅力－京町家の再生」「日本社会における自己のあり方」「メディアとコミュニケーション」「高まる日本人ブランドの志向について」「航空事故の発生とその防止について」「歴史環境問題について」「高齢者の行動形態」。まさに多様で、最初にあった「人間というものはつくづく不思議なものだ」。学生もそれを感じて三上先生のところへ行って研究をしていたんだなと、ふり返ってみると感じます。

稲葉：三上先生のゼミの社会シミュレーションのグループと接することがあったのですが、とにかく学生が非常に元気だということに驚きました。学生も元気だし、楽しんで研究している、自分のやっていることについて喜んでワッとしゃべっている。自分のゼミ生と比べると、なんでこんなに元気が違うんだろうと思うところがありまして。時々、学生と三上先生と私でいっしょに飲んだりすることがあった時に、学生と三上先生が友だちのように言いたい放題でアイデアでもなんでも自由にいいあっている雰囲気を見て「ほんとに人間の個性が好きなんだな」と思いました。三上先生は個性を大事にしてそれぞれの学生が、とにかく勉強とか研究を楽しんで、とことんまで自分の好きなことをやれと指導されているんだなと思いました。

私も大学院はコンピュータサイエンス出身なので政策科学部にきて最初は戸惑ったのですが、きっちりトレーニングをやるのが教員の使命ではないかと、学生が文句をいおうと何をいおうと、きっちり知識や理論を教えるというのがいいのかなと思っていたのですが、三上先生のスタイルを見て、特に文理融合型の学部では本人の問題意識とか本人の興味がすごく大事で、それをいかに伸ばすかということが政策科学部では大事なんだなということを、三上先生と三上先生のゼミ生から学びまして、それはすごくいい勉強になりました。私自身も最初は一応、コンピュータ教員ということだったのでプログラミングとかデータベースとか一生懸命やっていたのですが、「もし学生がそれに興味をもたなかったら、それはそれでいいんじゃないか。他に興味があることがあったらどんどん突き詰めてもらう、それを手助けする知識を与える、アドバイスするくらいが、この学部はいいのかな」という気がして、そうこうするうちに三上ゼミのいろんなテーマに近いような形で私のゼミもどんどんコンピュータサイエンスから離れて行って、今では私は何の教員なんだろうと、わからなくなるくらいになっているのですけど。

私のゼミも、初期の頃の学生に比べると、学生全般が元気で好きなことをやっているという気がしまして、三上先生がされていた方法を学んで同じように学生が元気になったという気がします。そういう意味で学生の指導の仕方、学生へのつきあい方とか学生の人間性の尊重の仕方とか、そういうところではすごく勉強をさせていただきました。

宮脇：私は直接よく存じあげないのですが、大学院のサーチプロジェクトでいろんな議論が密にされていて、いつも院生といっしょに飲みにいったり、楽しそうにされていたようですね。稲葉先生はサーチプロジェクトでもごいっしょでしたでしょうか。

稲葉：はい、途中からいっしょでした。三上先生は学生も院生も元気にするという天賦の才能をもっておられる方でした。いっしょに飲みについて、おとなしい方もよくしゃべる人も、みんな声をかけて、みんなを楽しくさせてお酒を飲んで雑談をしているんだけど、なぜか研究の方でもがんばってやろうという気になるという、そのへんがすごくうまいなと思いました。私自身はそこまでみんなと話をして結果的に勉強の方に動機づけをするなんてことは、なかなかできないのですが、その点ではすごい才能をもっておられる方だなと思いました。ご自身がいろんな分野の趣味をもって興味の多様性を受け入れることができる、好きなことをやることをわかっていたからこそ、変わったことをやっている人にも「それは面白い」といってどんどん励ますような感じでした。飲んでる間でもそういう感じでした。

宮脇：稲葉先生は三上先生とごいっしょにプログラムをつくられたと聞きました。

稲葉：そんなに長い期間ではないのですが、三上先生と渡滋先生がされていた社会現象のシミュレーションの中に人工知能とかエージェント技術を使うという研究グループに私も所属していて、いっしょにシステム開発をやったりしました。お二人が2大グループリーダーだったのですが、渡先生は東大の情報科学出身で理論とかプログラミング技術を徹底的に教えこむ職人の師匠みたいな感じの方だったのですが、三上先生は逆に自由に自分が興味があるところをうまく見つけてそこを追求しろという指導をされて、お二人を拝見していて、ほんと

にいいバランスだなと思いました。細かいところで技術を極める渡先生と、もっと自分の動機づけ、興味を突き詰めることが大事だという三上先生の間で、私も学生といっしょになって自分の興味を究めつつ、めぐりめぐって技術も高めるということをそのプロジェクトでやりながら、システム開発とか研究に参加させていただきました。

その経験はいい勉強になりましたし、今もそのパターンで興味を突き詰めつつ、それに必要な技術を学ぶということをやっています。まず黙って技術を学ぶということよりは興味にしたがって何かを付詰めるみたいな方向から始めているのですか、そこは三上先生の影響が大きいかなと思います。

宮脇：EBISS プロジェクトもそうでしょうか。

稲葉：EBISS、すなわち Experimental Basis for Informatics and Social Sciences かな。

森：それは多分、渡先生がエビスビールが好きだったから。

稲葉：そうですね。その頃、エビスビールを飲んでいました。

森：教育のところでは三上先生が一つ、政策科学部にとって大切なことを。僕は1994年の学部設立時の採用ですから、つくるまでの過程は私はわかりませんが、1994年にこの学部をつくる時に、コンピュータを必携にすることは、学部をつくる時からほぼ既定路線だったらしいのです。しかし三上先生がおられなかったら Windows マシンになっていたところを、三上先生が「いや、ここは Macintosh だ」と。今でこそグラフィカルユーザインターフェースのパソコンは普通になっていますけど、あの時に「直感的に使えるんだという思想のもとに設計された OS を使わせるべきだ」と強く主張されたのが三上さんだと聞いていて、実際に Macintosh を学生たちに購入してもらったことになりました。

あれは、ほんとに正解だったかなと思いますね。命令を打って操作するのではなくて、マウスと画面をクリックすることによって何か起きる、使えるんだというのを指導されて、翌年には Windows95 が出てきて4年後には Windows になってしまいますが、あれは三上先生の功績だと思います。その決断は正しかったと思います。あれはすごく大きかったなと。

稲葉：私も赴任した時に、全員が Mac を使うと聞いて、すごく進んでいるなと思いました。文系社系の学部で Macintosh のユーザ・インターフェースを使うというのは結構いい影響があるだろうなと私自身は思いました。当時の MS-DOS 型はコマンドを覚えないと使えないというものでしたが、コンピュータは人間が覚えなくても使えるべきなんだという発想でできたものを人文社会系の学生が触れるのは、教育的にもいいことだと感心しました。

森：僕は技術をメインにみますけど、三上先生は人間をみられていたから、その発想ができたんだと思います。

稲葉：そうですね。

Ⅲ. 三上達也先生のお人柄

井上：この写真(写真5)は三上さんが大学院生時代、保津峡でのバーベキューの時のものです。

また、理工学部が衣笠時代に、学園祭でアマチュアバンドの学内コンテストがあり、私の研究室に何人が演奏できる人がいたので三上さんがドラムを叩いて優勝したことがありました。私の研究室では毎年、野沢温泉にスキーに行っていて、私が還暦の年まで続いていましたが、民宿にピアノが置いてあって彼は楽譜なしで弾いていて上手だなと思いました。彼のお父さんは富山大学の教授でしたが、三上さんは学生時代、外国も含めてあちこち旅行し滞在したり、わりと自由奔放に学生時代を過ごしていたようです。反骨精神も旺盛で、学部学生時代髭はぼうぼうで、学科の教員から目をつけられていたようで、大学院の入試は合格したのですが、必須科目を落とし、当時は2科目8単位までは再試験があり実質救済されることが多かったのですが、彼は再試験に合格せず留年しました。次年度も大学院をめざし、当時、大学院入試は学部成績が50%、試験成績が50%でしたが、推薦入学の人を除いて試験成績はトップで合格しました。



写真5：バーベキューの様様（左端が故人）



写真6：青年時代（右端が故人）

大学院博士後期課程終了後、京都高度技術研究所（ASTEM）に勤務しましたが、数年後に立命館大学に政策科学部を新設することになり教員に応募しました。新学部設置準備室での選考を経て本人の専門の理工学部教授会での審査の際、京都高度技術研究所の所長であり理工学部の教授も兼任されておられた方が、自分の知らないうちに研究所員が政策科学部の人事に応募したことで反対意見を述べられるというハプニングもあったのですが、一般に転職する場合、定年退職する場合を除いて決定するまで上司には言わないのが通常であり、そのことを理解してもらって了解していただきました。また、教授会での決定後、立命館大学では保健センターの健康診断があり、これが厳しく、三上さんは血圧が高いと言われたのですが、時間ぎりぎりにバイクできて、走って保健センターに行くのですから高くても不思議ではないのです。通常、健康診断にあたっては慎重に行動しますが、彼はそんなことを気にしない、そんなところもありました。自由奔放な性格で、私から見たら羨ましいところがありました。

森：三上先生とは何度かいっしょに音楽をさせてもらって、私が学部4年生の時に学園祭に向けて学内のアマチュアバンドのコンテストがあって、せっかくだから出ようということになりました。しかしドラムがない。三上先生はギターとピアノが専門で、ドラムをどうしようか。三上さんに頼んでみよう。僕らは4年で三上先生はドクター1年生で上の年代なのですが、頼んでみようと思ってしまう先輩だったので「僕ら出ようと思うのですけど、ドラム叩

いてもらえますか?」「ええで。何するの?」「これとこれです」「わかった。練習する時、俺が部屋借りといてやる」と乗り気になって、すごく楽しくやらせてもらって。幸いなことに優勝してしまうということで楽しい思い出でした。教員になってからも一度だけ園遊会で僕と三上さんがギターで演奏しました。「もう一度やりたいな」という話をしていたのですが、もう一度できなかったのが残念です。楽しい思い出でしたね。バーベキューでも僕と私と同期の大場君で場所の下見から準備をして三上先生にもきてもらって。先生がいると場がなごむというか、彼自身が気をつけているつもりは全くなくて普通に自然にいろんなところに話をしにいくんだと思うのですが、人数が多いと幾つかのグループに分かれてしまいがちですが、三上先生は全体を、知らない間にとりまとめているというところがあったのが印象深いですね。

稲葉：いろんな思い出がありますが、飲みに誘われてというのが結構多くて、三上先生が行きつけのお店を何軒か回るといふ。三上先生がいられる店はこだわりの店で、音楽にこだわっているところとかエイジアンテーストにこだわっているところとか変わったところばかりで、私は政策科学部に勤めたばかりで、ほんとに若手なのですが、僕みたいな若手を三上先生は店のほぼすべての人にちゃんと紹介して「みんなで楽しくやろう、仲間だ」という感じでいっしょに飲んだり、話したりというのは、心理的にもありがたかったし、三上先生の人をつなぐ能力は天才的だと思いました。全然知らない人でも三上先生が間にいると全く違う分野の人でもとりあえず会話ができてしまうという不思議な体験を何回もしました。

もう一つの思い出はEBISSプロジェクトの渡先生との関わりです。彼は日系ブラジル人ですが、子どもが中学校に入る前にブラジルに帰りたいと言っていました。しかしブラジルに帰って強盗に襲われて撃たれて亡くなったのです。その後、三上先生は飲みながら、飲むたびに涙が止まらないという、「あいつとはソウルでわかりあっていたんだ」といながら涙が止まらないということが、しばらく続きまして、三上先生はソウルでつながる、心でつながるという人なんだなと。仲間を亡くす、心の友を亡くして泣き尽くすという、すごい情の厚い方だったんだなと思いました。私は年齢は下ですけど、ちょっとした相談があると三上先生に相談に行くということがよくありました。三上先生が亡くなられてお通夜とかお葬式があった時、さて、香典とかいくらもっていくんだらうと思いつつ、「そういう相談ができる本人はもういないんだ」とハッと気がついて、いかにあの人格に助けられていたかがよくわかりました。

森：最初に倒れられた以前は二次会、三次会と飲んでいました。それ以降は11時、12時には帰られるようになって気をつけてはおられた。それで僕らも油断していて、もうちょっとセーブしていただいていたら、こんなことにならなかったなと。

稲葉：医者にかなり止められているというお話はありましたけど。ここでやめなさいと森先生からいわれていると噂で聞きましたね。

森：僕らが学部生、大学院生の時、若いから世間話をしている時に、何げに「お前、研究どうなった。研究についてどう思うんだ」と何げにふってくれて、またその話をして盛り上がるということがありました。押しつけではなく普通にすることができるのが、あの人の人柄なんだなと。

稲葉：飲んでる時でも研究の話も世間話もされてそれが自然につながっていく感じで。研究

自体も趣味のように楽しんでいるという感じでした。

森：渡先生と年齢も近くて意気投合されていて、プロジェクトではまさにペアで引っ張っていったので、渡先生がブラジルに帰国されしかも突然の渡先生の訃報というのがショックだったのではないかと。

宮脇：私も三上先生から教えていただいたことがいろいろありますが、立命館を愛されていましたね。政策科学部で長くおられたこともあり、熱く語っておられました。

稲葉：井上先生についてのお話も、よく三上先生から「面倒みていただいた」ということを聞かされました。「人工知能の研究をなんでやるようになったのですか？」と質問したら「井上先生に励まされて大学院までできてしまった」という話を何十年か前に話を伺って、あの時から井上先生ってどういう方だったのかなと、いつかお会いしたいと思っておりました。

井上：彼は卒業の時、留年した時はがっかりしましてね。会社に勤めようかなという話もしましたが、大学院に入って研究所に勤めて大学に。彼の人生としては趣味と仕事を楽しくでできる職場でよかったと思いますね。民間会社に入っていたら、おそらく転々として。彼の能力は抑えつけられて。大学はそういうことは少ないから。研究所でも枠があったみたいですけど。

森：三上先生が研究所にいた時、一度「文献調査のアルバイトをしないか？」と誘っていただいて、その時に、三上先生からそういう愚痴とか、それ以外には一度も聞いたことないんですけど、ASTEMで「自由度がない」のがだいぶこたえておられて「それがちょっと辛い」ということを。そんなこと、ほんとにそれ以外聞いたことがないですけど、「ああ、そうなんだ」と。縛られる人ではないから、あれはちょっと辛かったのかなと。今、ふり返ってそう思いますね。

宮脇：私は、2004年着任で先生方に比べると三上先生とのおつきあいは短いのですが、2011年～2013年まで副学部長を同時期に3年連続で三上先生とともに務めまして、三上先生からいろいろ教えていただきました。2011、12年度に三上先生は企画委員長で、政策科学部を愛されていたので、企画委員会でも熱心に語っておられました。2014年度から政策科学部は大きくカリキュラムが変わりました。その基本方針を2011年度に最初に出されたのが三上先生でした。先生のお力がなければこういう形にはならなかったと思います。また2013年度に大学院担当副学部長をされて、そちらもカリキュラム改革があり、三上先生のご尽力のたまものだと思っています。

OIC移転にも関心をもっておられて、開設準備委員会で最初、キャンパスの平面図の原案が出てきた時に、三上先生は四角形の斬新なキャンパスの建物のアイデアを出され、ご自身で図案（写真7・8参照）を緻密に描かれました。三上先生が書かれる会議のメモは、比較的シンプルなものが多かったのですが、この平面図はととてもきっちり描かれていて感嘆しました。アイデアが豊富で丁寧な仕事もされて、加えて移転という大事業で思い入れが深かったのだと思います。茨木に移転してOICの研究室で三上先生のご研究、教育はますます発展するはずだったのに、残念ながらその前に亡くなられてしまいました。しかし、我々としては、三上先生のアカデミックな夢を引き継いで、OICを見ることがなかった三上先生の役割を担うことで、遺志を継承していくことが必要ではないかと考えます。

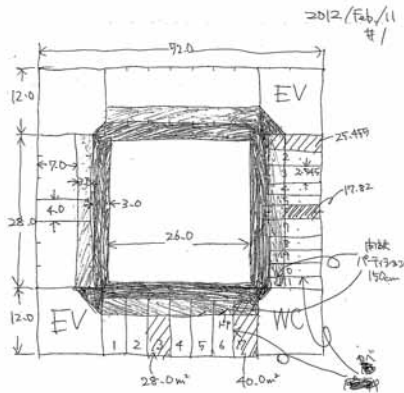


写真7：OICの平面図案

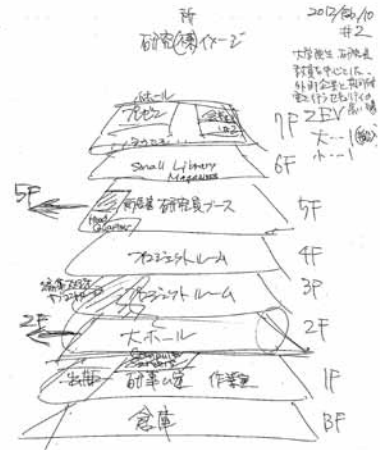


写真8：OICのフロアのイメージ案

森：今思い出したのですが、三上先生はあまり人に見せることはなかったのですが、実は絵がすごくお上手で、僕たち大学院生だった時に机にきれいな絵があって「これ誰が描いたの?」「これは俺が描いたんだ」。アーティスト的な才能を豊富にもたれた方で、その図面もそういう能力を発揮されていたんだと思います。

宮脇：本日は、みなさまありがとうございました。



写真9：座談会の模様（於：OIC A棟8階Co-Lab.）